龍ケ崎、歩く歴史講座

楽しく歩きながら龍ケ崎の歴史を学ぼう!

令和 2 年 12 月 5 日（土）実施

主催 龍ケ崎市市民活動センター

共催 龍ケ崎市教育委員会

NPO 法人龍ケ崎の価値ある建造物を保存する市民の会

案内人/資料作成　前田享史（NPO 法人龍ケ崎の価値ある建造物を保存する市民の会）

コース

↓　旧諸岡家赤レンガ門塀

↓　筑波庵

↓　旧小野瀬家住宅

↓　龍ケ崎城跡

↓　陣屋跡

↓　鹿島神社

↓　大統寺

↓　八坂神社

参考資料　龍ケ崎市市史　中世編　近世編

旧諸岡邸赤レンガ門塀

明治末、龍ケ崎市米町の諸岡良佐（もろおかりょうすけ）氏が自宅に建てた赤レンガ門塀で、移築前は、7000 ㎡の敷地をぐるりとレンガ塀で囲んでいて、大柱の高さ 3.8 メートルと、個人邸洋風煉瓦門塀として、全国的にも特筆される規模でした。門柱 4 本のデザインも秀逸で、東京駅と同じ覆輪目地(フクリンメジ)で施工されています。レンガの積み方は主にイギリス積みで、脇柱の幹部だけがフランス積みとなっています。

平成 18 年（2006)、諸岡家の敷地が別途使用となり、赤レンガ門・塀は解体消滅の危機となりました。そこで、こうした古い建造物を愛する市民は赤レンガ保存実行委員会を発足させ、移築保存への協力を呼びかけました。当初は現地保存が出来ないか様々な模索をしましたが、移築しか保存方法がありませんでした。

その年、赤レンガ保存実行委員会は門塀を解体し、その部材を諸岡家から譲り受け、別の場所に保管し募金活動を開始しました。この運動を通して集まった市民からの募金及び市の協働事業による助成金と東日本鉄道文化財団からの助成金により、9 年の歳月を経て 2015 年秋に八坂神社隣の市有地に移築が完成しました。

覆輪目地とは、半円形で中央を盛り上がらせて目地を強調する工法で、レンガを美しく際立たせる効果があります。日本独自の技法で、この技術は伝承されておりません。

移築の規模は大柱の高さ：3.8m　小柱の高さ：2.9m　塀の高さ：2.2m　塀の部分：9m　全長：17mで、移築場所等の関係で塀の長さは縮小されました。2018 年 5 月、国・登録有形文化財に登録となりました。

諸岡良佐氏は米町の代々庄屋を務めた諸岡家の分家で、検事正を経て実業界に入り、龍崎銀行頭取や龍崎鉄道社長（６代）を勤めました。また第 11 代町長（大正２年９月～大正４年４月）として町政発展に尽くしました。更に竜ヶ崎二高の前身、町立龍ヶ崎女子技芸学校の設立、龍ヶ崎中学校の充実に努めました。その顕徳碑は米町薬師堂境内に建っています。

良佐氏の長男諸岡良夫氏は諸岡医院を開業し、医業の傍ら龍崎鉄道社長（８代)、消防組頭などの要職を務め、さらに第１７代･１８代(昭和２年４月～昭和７年６月）の町長として龍ヶ崎町政の発展に尽しました。氏の業績を象徴するものとして、昭和２年の町章制定があります。「龍玉を据んで発展」を意味するこの町章は、町民に図案を募集して制定したもので、現在もそのまま龍ヶ崎市章として用いられています。

大正時代の諸岡家赤レンガ門

杉野翠兄（すいけい）と筑波庵

屋根が筑波山の形をしていることから筑波庵と呼ばれているこの屋敷は、江戸中期の学校（俳句の道場）で、近世の俳諧における貴重な文化財と考えられます。

建物の構造は木造平屋、藁葺屋根（現状はトタン葺き）和室 3 間の他増築部分に台所と風呂場があり、いたって質素な造りです。質素な中にも、翠兄時代のものと思われる、床の間の落とし掛け、長押しの雛止め部分や釘隠し、杉材による一枚板の建具など格調高い意匠となっています。

長年管理人不在が続き現在は廃屋となっており、このままだといずれ朽ち果ててしまいます。そこでＮＰＯ法人龍ケ崎の価値ある建造物を保存する市民の会は、これを何とか次世代に残せないかと模索しながら、所有者と話し合いの上、雨漏りの補修、庭内の草取りや寒山竹の剪定等の管理を代行しております。

貴重なのは建物だけでありません。庭内には服部嵐雪の句碑があり、同じく庭内の寒山竹は市・指定文化財になっております。NPO 法人はこれらを合わせて史跡として、また翠兄の功績が体感出来る施設として、生かしていく方法を考えております。

杉野翠兄は宝暦 4 年（1754)、龍ケ崎村の油商を営む杉野治兵衛家に生まれました。家業を継ぎ世襲名杉野治兵衛を名乗りますが、その傍ら江戸に出て松尾芭蕉の流れを汲む俳人大島蓼太(おおしまりょうた)の弟子となり江戸俳諧で活躍しました。

天明元年（1782）翠兄は筑波山の鳥居傍に嵐雪の碑を建てました。嵐雪とは松尾芭蕉の高弟服部嵐雪のことで、これがきっかけとなり翠兄への入門者が増えました。そして、翠兄は弟子の教育の場として龍ケ崎上町に筑波庵を建てました。弟子の数は数百人と言われ、常陸、下総、下野に江戸俳諧をひろめました。七畳半の和室は翠兄が活躍した往時を偲ぶことが出来ます。

庭内の嵐雪の句碑は「めい月や柳の枝を空へふく」と刻まれています。また、砂町医王院には大島蓼太の「たましひの入れものひとつ種ふくべ」という句碑があります。いずれも翠兄が建てました。

蓼太の没後は江戸俳諧の雄の一人といわれ、小林一茶とも交流がありました。

文化 10 年（1813）60 才で没し大統寺に葬られています。

筑波庵室内

登録文化財・旧小野瀬家住宅

江戸後期より代々小野瀬忠兵衛を名乗った龍ケ崎を代表する豪商の店舗及び邸宅です。

初代は筆墨、米殻を商い筆屋新助と名乗り、天保年間（1830 年代）30 代で財を築きました。元々は筑波の麓北条の人と伝えられ、いつ頃から龍ケ崎に居住したかは分かりませんが、文久 2 年（1862）年に天王社（龍ヶ崎鎮守八坂神社）に小野瀬新助名義で多額の寄進をしていることが記録されていて、既に龍ケ崎に本拠を置き、名字が許されていたことが分かります。その後、忠兵衛を名乗ったと思われます。

明治になり、三代目忠兵衛は、干鰯（ほしか＝鰯を乾燥させた肥料）と塩の専売で財をなし、明治 39 年（1906）龍ケ崎農商銀行の創立発起人を務めました。

五代目忠兵衛は実業家であるとともに、戦後衆議院議員を 3 期務めるなど政治家としても活躍し龍ケ崎の発展に尽力しました。黄綬褒章と紺綬褒章を受章しております。

旧小野瀬邸は、そうした歴史を踏まえ、平成 16 年（2004）、店舗と、その奥の母屋が龍ケ崎市第一号となる国・登録有形文化財になりました。

登録有形文化財になった当初は様々なイベントに活用されましたが、現在は所有者の住居となっているため原則イベントや見学は出来ません。

現在の店舗は、四代忠兵衛によって大正 13 年に建てられたもので、木造 2 階建て一部平屋、間口 5 間、奥行 3 間、建築面積 210 ㎡あります。

店舗奥の母屋は明治初期の建築物で、木造平屋建て、建築面積は 65 ㎡。老朽化が著しく、近年所有者によって修繕されました。

外観は、町屋棟は木造出し桁造りで、欅材を多く用い、高い 2 階建ての典型的大正期～昭和初期の町屋作り建築の特徴を良く備え、質も高く、豪商の商う町屋建築の印象を受けます。住居棟の外観からは、桁から下の壁を押縁下見板張にし、それ以上の壁を漆喰塗りにする同期の伝統的和風住宅の特徴を良く備えていて、当時の豪商の様子を偲ぶことが出来ます。

登録有形文化財 旧小野瀬家住宅

龍ケ崎城

龍ケ崎城郭見取り図

文字の縦表示は史跡　横表示は現在の地名及び名称

龍ケ崎城が所在した龍が峰の元の形は、現在の竜ケ崎二高から御岳神社に続く小高い連なった丘で、龍の頭の形をしていたから龍が峰といわれるようになりました。

城があった頃は、空堀や自然の地形によって本城、中城、外城と三つの曲輪に分かれていました。本城、中城、外城という名前は廃城後耕作地となった後の小字名です。この小字名により、曲輪の役割が伺えます。本丸は本城と名前が付いたところで、この場所は高度成長期の都市開発で、丘は削り取られ住宅地に変えられてしまいました。

中城は本城より広く、曲輪Ⅲ（仮称）が所在し、それに付随するⅣとⅤの二つの曲輪がありました。幸いにも竜ケ崎二高が立っているため峰の形がそのまま残っていています。藪の中に僅か土塁が見受けられ、西側に鹿島神社があり、狛犬などが一部現存し僅かながら城郭の面影を忍ぶことが出来ます。

外城は曲輪Ⅰ（仮称）が所在し、狭い場所だったので高見台程度の曲輪だったと想像します。この曲輪内に土岐家の氏神様大日社が祀ってありました。その場所は現在御岳神社が建っていますが、危険個所があり私有地のため立ち入ることが出来ません。

龍ケ崎城概要

かつて常陸国南部を支配した土岐氏は、美濃国守護を務める土岐氏の支流で、南北朝時代美濃国遠山荘原郷（現岐阜県恵那市山岡町原）を拠点に置いたことから原氏を名乗っていました。その後原氏は関東管領上杉氏の被官として関東に下向し、江戸崎に本拠を置きました。これが常陸南部で勢力を伸ばした原氏のはじまりで、千葉原氏と区別するため土岐原氏あるいは常陸原氏といわれることもあります。一方美濃国では、守護である土岐頼芸（よりあき）が斎藤道三によって国を追われ江戸崎に身を寄せます。こうして土岐宗家が没落したため、原氏は土岐氏の再興のため土岐氏を名乗ります。以下、総て土岐氏で統一します。

江戸崎城主土岐治英（はるひで）は、下河辺氏が築いた町場がある龍ケ崎地方を統治するため、龍が峰という丘陵に城を築きました。永禄１０年（1567）10 月から改築工事がはじまり、翌 11 年に治英の次男胤倫（たねとも）が城主として配置されたと記録されていますので、築城はそれ以前ということが分かります。龍ケ崎城を土岐氏第二の拠点とするための大規模な改築だったと思います。龍ケ崎城の城主となった土岐胤倫は龍ケ崎のまちづくりに着手します。そして多くの事跡を残しますが土岐氏の支配は長くは続きませんでした。

その後、豊臣軍の小田原北条征伐に伴い、天正１８年（1590）北条傘下の土岐氏は豊臣傘下の佐竹義宣（さたけよしのぶ）軍との戦いで敗れ落城となります。その後、龍ケ崎の支配者は芦名盛重（佐竹義宣の実弟）となります。盛重は龍ケ崎城を廃城にし、江戸崎城を本拠としてこの地を支配します。しかし、関ケ原合戦では石田三成に加担した芦名氏は、徳川家康による戦後処理で、慶長 7 年（1602）江戸崎領を失い、秋田に左遷となりました。その後、龍ケ崎は関ケ原で戦功のあった伊達政宗の領地となります。

鹿島神社

升屋平右衛門が寄贈した灯篭

祭神は武甕槌命（たけみかづちのみこと）で、社伝では、戦国時代の天正年間、土岐頼貞が城中の守護神として勧請したとされます。土岐氏の本城である江戸崎にも城中に鹿島神社を勧請しており、土岐氏の鹿島神社に対する信仰心の篤さが伺えます。

また、伊達政宗もこの神社を敬い、慶長 11 年（1606）修復。その後、文化 10 年（1813）にも修復された記録があります。

かつては五間四方（約 82 ㎡）の規模の社殿があったそうですが、明治１４年（1884）に焼失し、現在の無残な姿になりました。境内には文化年間に升屋平右衛門が寄贈した灯篭があります。升屋平右衛門は仙台伊達藩の財政を支えた人といわれています。さらに仙台商人及び近江商人が寄贈した一対の狛犬があります。

仙台藩龍ケ崎領陣屋跡

慶長 11 年（1606）伊達政宗は徳川幕府から常陸国河内郡 13 か村（下記参照）、信太郡 13 か村（下記参照）合わせて 1 万石余りを与えられて、仙台藩常陸国龍ケ崎領が誕生しました。このうち、龍ケ崎村は 1238 石で、龍ケ崎藩領の中で最大規模でした。

政宗は龍が峰の西麓に陣屋を築き、代官を置き領内の支配を行いました。陣屋には御陣屋門、御代官門、根町入口御門があり、道を隔てた向かい側に代官とその配下及び足軽の住居があったようです。また、現在の龍ケ崎小学校正門を入ったところに陣屋池（水堀跡）がありました。

寛文 3 年（1663）幕府による新利根川の開削や谷原新田開発のため、龍ケ崎村を除く河内郡の 12 か村が召し上げられ、代わりに筑波郡の 4 か村（下記参照）が与えられました。

慶応 4 年＝明治元年（1868）戊辰戦争では賊軍となった伊達藩は、代官をはじめ陣屋役人が当地を離れ、陣屋は打ち壊しになりました。そして仙台伊達藩の支配は終焉を迎えます。

仙台伊達藩龍ケ崎領の村々（）内は現在の市町村名

河内（かっち）郡 13 か村（龍ケ崎村を除いて寛文 3 年まで）

龍ケ崎村、長沢村（河内町）、脇川村（稲敷市）、狸穴村（稲敷市）、狸穴新田村（稲敷市）、角崎村（稲敷市）、芝崎村（稲敷市）、小野寺内村（稲敷市）、小野太田村（稲敷市）、堀川村（稲敷市）、清水村（稲敷市）、町田村（稲敷市）、市崎村（稲敷市）

信太（しだ）郡 13 か村

板倉村（阿見町）、若栗村（阿見町）、廻戸村（阿見町）、青宿村（阿見町）、竹来村（阿見町）、大室村（阿見町）、掛馬村（阿見町）、追原村（阿見町）、君嶋村（阿見町）、上長村（阿見町）、実穀村（阿見町）、福田村（阿見町）、請領村（美浦村）

筑波郡 4 か村（寛文 3 年より）

吉沼村（つくば市）、西高野村（つくば市）、大砂村（つくば市）、大園木村（下妻市）

根　町

源頼朝の信頼を得て常陸国南郡の地頭職を任された下河辺政義（しもこうべまさよし）は、文治 2 年（1186）領地であった貝原塚の領民を引き連れ、沼沢であった根町を開拓しました。これが最初の龍ケ崎の町づくりです。なお下河辺の子孫はこの地にとどまり、地名から龍崎を名乗ったといわれています。その後、永禄 11 年（1568）に土岐胤倫は、龍ケ崎城の城主となり、この地を支配します。そして龍ケ崎第二の町づくりを行いました。それが上町を中心とした現在の市街地の原型となります。

城の周りには家臣の住居を中心とした武家屋敷町が形成され、武家人のための商工業町は根町に形成されます。根町は土岐氏によって誘致された商職人や、一部の家臣の屋敷が多かったようです。龍ケ崎の町が八坂神社を中心として栄える中、根町は格式の高い町だったことが考えられます。

大統寺

大統寺は山号を龍峰山（りゅうがみねさん）といい、釈迦如来（釈迦牟尼仏）を本尊とする曹洞宗の古刹です。龍ケ崎城主土岐氏の菩提寺で、江戸時代になると、伊達家の位牌を安置し、寺領がつけられていていました。文久 4 年（1864）の調べでは 24 石余の保有地を持ち僧侶のほか弟子 2 名が居て、無住になった寺院を管理していました。かつて「花の横町」といわれ賑わいを見せていた横町はこの大統寺の門前として栄えた町です。

創建は天正 13 年（1585）、龍ケ崎城主・土岐胤倫は根町にあった臨済宗大運寺を現在地に移転させ、大聖院、天真院の二つの寺を合わせて大統寺としました。そして胤倫の叔父天岩梵宿（てんがんぼんしゅく）和尚（下総国香取郡土室村祥鳳院の住職）を招いて曹洞宗の寺院として開山しました。

寛文年間（1661-1672）に本堂再建、文化年間（1804-1817）に改修、山号を龍峰山（りゅうがみねざん）としました。改修を記念して本堂の前に竹柏（なぎ）を植えたそうです。竹柏はマキ科の常緑高木で温帯植物です。関東地方でこのように大木に成長したのは珍しいことで、市指定天然記念物となっています。

なお、二世の日山梵朔（にちざんぼんさく）は慶長 3 年（1598）砂町に医王院を開山し、大統寺の隠居寺としました。開基は土岐胤倫となっております。医王院は明治 37 年（1904）の独立した寺院になるまで大統寺住職が兼務しました。

境内には不動堂、大師堂などがあります。そして境内の墓地には土岐胤倫や仙台藩家臣の墓があります。土岐胤倫は龍ケ崎落城後、不遇の身となり領内にしばらく居住し、慶長 4 年（1599）に死去します。法名は「大統寺殿統厳正公庵主」で、このことから大統寺という寺名は、胤倫の死後につけられたと考えることが出来ます。

また、俳人杉野翠兄の墓があり、法名は「狐峯軒徳府道隣居士」で、碑文によると、人となりは風流で俗を離れてあっさりしており、俳諧では滑稽でおもしろい佳い句をたくさん作ったとあります。

大統寺境内　土岐胤倫公の墓

八坂神社

文治年間（1185～1190）源頼朝から地頭として常陸南部を領していた下河辺政義（しもこうべまさよし）は、領地であった貝原塚の領民を引き連れ、沼沢の地であった根町を開拓した際、貝原塚の鎮守天王社（八坂神社）を勧請したといいます。現在の般若院境内に所在したといわれ、その当時は般若院が別当を務めていたそうです。

その後、天正 5 年（1577）に龍ケ崎城主土岐胤倫は龍ケ崎の第二の干拓を行います。それが現在の龍ケ崎の市街地である上町・下町に当たります。その時、根町から現在地に天王社を遷したといいます。その後、龍ケ崎の鎮守として、代々の領主と住民の厚い信仰に支えられ現在に至っています。別当は天台宗龍星院（廃寺）が務め、無住になってからは下町の龍泉寺が代行したそうです。

祭神は建速須佐之男命（すさのうのみこと）で京都八坂神社を本社とし、水を主宰する国土開発の神であり、農耕・商工運輸交通の道を授け悪事災難を取り除く守護神です。江戸時代までは神仏習合の影響で、天王社と称し、牛頭天王を祭神として祀っていました。明治の神仏分離によって、速須佐之男命（牛頭天王とで同一視）を祭神とする神社に再編させられ、八坂神社と称することになりました。このような経緯から今でも八坂神社を天王様と称することがあります。

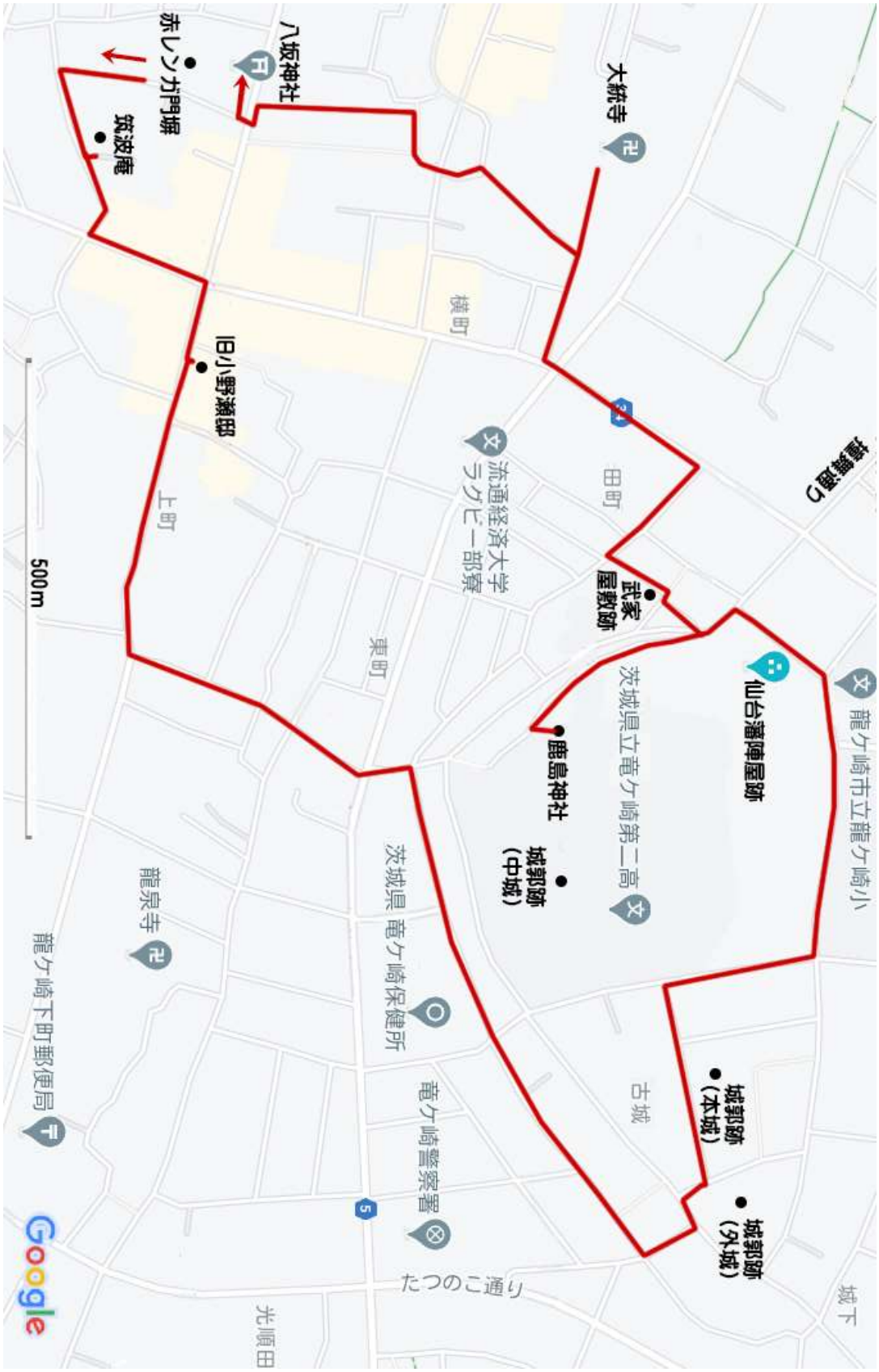
本殿は享保 20 年（1735）に建替えられたもので、壁面全てに人物、動物、植物の彫物をはめ込んだ特色があるもので、昭和 54 年（1979）に市指定文化財になりました。なお、拝殿及び幣殿は平成 27 年（2015）に全面的な改装を行っております。

7 月下旬に行われる祇園祭は県南最大級のお祭りで、神輿や剣山車、太鼓などの行列が氏子区域を 3 日かけて渡御（とぎょ）します。最終日の夕刻からは、根町の撞舞通りにおいて「撞舞」「神馬」「獅子」の三神事が行われ、通りは大勢の人で埋め尽くされます。「撞舞」は、八坂神社が根町にあったころから行われていたと言われ、その名残として、撞舞ほか三神事が今も根町で行われています。

1999 年（平成 11 年）に国選択無形民俗文化財に選ばれ、2010 年（平成 22 年）県の無形民俗文化財に指定されました。撞舞の起源に付いては中国から奈良時代に伝わった散楽（軽業・奇術・滑稽物真似に音楽を伴った雑多な芸能）が神前で行われる芸能となり時代とともに地方に伝えられ、庶民生活と密着して変化したものと考えられています。

八坂神社

地図


赤レンガ門塀
八坂神社
筑波庵
大統寺
旧小野瀬邸
横町
田町
上町
東町
流通経済大学ラグビー部寮
武家屋敷跡
仙台藩陣屋跡
龍ケ崎市立龍ケ崎小
茨城県立竜ケ崎第二高
鹿島神社
城郭跡（中城）
茨城県 竜ケ崎保健所
龍泉寺
龍ケ崎下町郵便局
竜ケ崎警察署
古城
城郭跡（本城）
城郭跡（外城）
たつのこ通り
光順田
城下
500m
Google